

3/25
福井

ふくいを生きる

第1景

超高齢社会

恋の思い出話を周りから勧められ「これからせん(恋をしない)」なる人のや」。若狭町の前町長・千田千代和さん(79)のユーモアたっぷりの返事で、20人の高齢者が笑い声を上げる。同町で開かれる月に一度の集いは、介護の悩みを打ち明けたり、交流を深めたりする場だ。

千田さんは旧三方町時代から12年にわたり町長を務め、2009年に退任。以来、自宅で認知症の妻勝美さん(78)を介護している。症状が始めたのは約15年前。現在の要介護度は重度の5で、会話もできない。結婚して54年。夜になると、勝美さんの足元にタオルで着いた湯たんぽを置くのが日課だ。「自分がうど、妻は笑ってくれるんだや」

町長在任中、福祉担当者が「高齢者の30%が認知症す

⑤認知症を告白

地域理解心の支えに

備車」と知られる。「高齢化社会の大変な課題」と痛感した千田さんは、認知症の理解を進めるため、勝美さんの病気をオープンにした。現在は県内各地で自身の経験を語っている。「つらいときもあるが、認知症は病気なんだと自分を納得させることができ

■ ■ ■

越前市の田代悦子さん(75)も夫の病気をオープンにした一人だ。認知症と診断された6年前、夫婦で近所約20軒を回り、「迷惑を掛けたかもしれない」とお願いに歩いた。事だった。夫は昼夜なく「ライオンが



仲間と笑顔で会話する千田さん(左から3人目)。介護の悩みを打ち明けることもある=1月11日、若狭町岩屋の「ラムサール『わかさ』」

近所の人から「大丈夫? 奥さん」と声を掛けられたり「こんなおむつを使ってみたら」と教えられたりした。周囲の人たちは、親身になつて悩みを聞いてくれた。悦子さんは「何百倍も心が楽になった」と話す。

体力の低下とともに腰もかになつていった夫は昨年6月、悦子さんに見守られながら

家族を支えていく認知症サポートセンター養成などを若狭町で行っている高島久美子さんは、「今の薬は認知症の進行を抑える」とかである。とにかく早期発見」と話す。病院の外へ相談していた時、受診するのは重症の人ばかりで、途方に暮れる家族の姿が目に焼き付いているからだ。

12・1%を大きく上回る。高島さんは「地域全体で病気を正しく理解すれば、早期発見につながり、発症しても安心して暮らせる地域になる」と力を込める。(堀英彦)

いっぽじあるん書いた…。
154歳で世界記録だ。

■ ■ ■

県内で要介護認定を受けている認知症人は2万824人(16年)で、05年比で79・7%増。団塊の世代が75歳以上になる25年には、65歳以上の5人に1人が認知症になるとも言われる。

連載「ふくいを生きる」の感想、意見を募集しています。連載は福井新聞ホームページからもご覧になれます。編集局社会部=☎0776(57)5110、FAX0776(57)5145、メールはhoudou@fukuishimbun.co.jp